

**[A年] 聖霊降臨節第12主日(2021年8月8日)****【旧約聖書日課】エレミヤ書 20章7～13節**

- 7 主よ、あなたがわたしを惑わし  
わたしは惑わされて  
あなたに捕らえられました。  
あなたの勝ちです。  
わたしは一日中、笑いにされ  
人が皆、わたしを嘲ります。
- 8 わたしが語ろうとすれば、それは嘆きとなり  
「不法だ、暴力だ」と叫ばずにはいられません。  
主の言葉のゆえに、わたしは一日中  
恥とそしりを受けねばなりません。
- 9 主の名を口にすまい  
もうその名によって語るまい、と思っても  
主の言葉は、わたしの心の中  
骨の中に閉じ込められて  
火のように燃え上がります。  
押さえつけておこうとして  
わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。
- 10 わたしには聞こえています  
多くの人の非難が。  
「恐怖が四方から迫る」と彼らは言う。  
「共に彼を弾劾しよう」と。  
わたしの味方だった者も皆  
わたしがつまずくのを待ち構えている。  
「彼は惑わされて  
我々は勝つことができる。彼に復讐してやろう」と。
- 11 しかし主は、恐るべき勇士として  
わたしと共にいます。  
それゆえ、わたしを迫害する者はつまずき  
勝つことを得ず、成功することなく  
甚だしく辱めを受ける。  
それは忘れられることのない  
とこしえの恥辱である。
- 12 万軍の主よ  
正義をもって人のほらわたと心を究め  
見抜かれる方よ。  
わたしに見させてください  
あなたが彼らに復讐されるのを。  
わたしの訴えをあなたに打ち明け  
お任せします。
- 13 主に向かって歌い、主を賛美せよ。  
主は貧しい人の魂を  
悪事を謀る者の手から助け出される。

**【使徒書日課】使徒言行録 20章17～35節**

17パウロはミレトスからエフェソに人をやつて、教会の長老たちを呼び寄せた。18長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。19すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えてきました。20役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。21神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ

人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです。22そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。23ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げてくださっています。24しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。25そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。26だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。27わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。28どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なされたのです。29わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。30また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。31だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。32そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継ぐことができるのです。33わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。34ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。35あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」

**【福音書日課】マタイによる福音書 10章16～25節**

16「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。17人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。18また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。19引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。20実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。21兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。22また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。23一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい。はっきり言っておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。24弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。25弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者ももっとひどく言われることだろう。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## エレミヤ書 20章7～13節

- 7 主よ、あなたが怒わしたので  
私は怒わされました。  
あなたは私より強く  
私にまさりました。  
私は一日中、笑い物となり  
皆が私を嘲ります。
- 8 私は語るごとに叫び  
「暴虐だ、破壊だ」と声を上げなければなりません。  
主の言葉が私にとって、一日中  
そしりと嘲りとなるからです。
- 9 私が、「もう主を思い起こさない  
その名によって語らない」と思っても  
主の言葉は私の心の  
骨の中に閉じ込められて  
燃える火のようになります。  
押さえつけるのに私は疲れ果てました。  
私は耐えられません。
- 10 私は多くの人の中傷を聞きました。  
「周りから恐怖が迫る。  
告発せよ、我々は彼を告発しよう」と。  
私の親しい者も皆  
私がつまずくのを待ち構えています。  
「彼は怒わされるだろう。  
そうすれば、我々は彼に勝って、復讐できる」と。
- 11 しかし主は、恐るべき勇士のように  
私と共におられます。  
それゆえ、私を迫害する者はつまずき  
私にまさることができません。  
彼らは悟りを得ないので、大いに恥をかき  
それは忘れられることのない  
とこしえの恥辱となるでしょう。
- 12 正しき人を試み  
思いと心を見られる万軍の主よ。  
私に見せてください  
あなたが彼らに復讐されるのを。  
私はあなたに向かって  
私の訴えを打ち明けたのですから。
- 13 主に向かって歌い、主を賛美せよ。  
主は貧しい人の魂を  
悪をなす者の手から救われた。

## 使徒言行録 20章17～35節

17パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。18長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に足を踏み入れた最初の日以来、いつも私があなたがたとどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。19すなわち、謙遜の限りを尽くし、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。20役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。21神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証してきたのです。22そして今、私

は、霊に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。23ただ、投獄と苦難とが私を待ち受けているということだけは、聖霊がどこの町でもはっきりと告げてくださっています。24しかし、自分の決められた道を走り抜き、また、神の恵みの福音を力強く証しするという主イエスからいただいた任務を果たすためには、この命すら決して惜しいとは思いません。

25そして今、あなたがたが皆もう二度と私の顔を見ることがないと私には分かっています。私はあなたがたの間を巡回して御国を宣傳伝えたのです。26だから、特に今日ははっきり言います。誰の血についても、私には責任がありません(直訳→私は清い)。27私は、神のご計画をすべて、余すところなくあなたがたに伝えたからです。28どうか、あなたがた自身と羊の群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神がご自身の血(別訳→御子の血)によってご自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命されたのです。29私が去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、私には分かっています。30また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。31だから、私が三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。

32そして今、あなたがたを神とその恵みの言葉とに委ねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に相続にあずからせることができるのです。33私は、他人の金銀や衣服を食ったことはありません。34ご存じのとおり、私はこの手で、私の必要のためにも、共にいた人々のためにも働いたので、35あなたがたもこのように労苦して働いて弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、私はいつも身をもって示してきました。』

## マタイによる福音書 10章16～25節

16「わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものである。だから、あなたがたは蛇のように賢く、鳩のように無垢(別訳→素直)でありなさい。17人々には用心しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれる。18また、私のために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。19引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。言うべきことは、その時に示される。20というのは、語るのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる父の霊だからである。21兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子は親に反抗して死なせるだろう。22また、私の名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。23一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げなさい。よく言うておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。

24弟子は師を超えるものではなく、僕は主人を超えるものではない。25弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者はなおさら悪く言われることだろう。』

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・8月8日「聖霊降臨節第12主日」の日課主題は「苦難の共同体」。福音書日課は「マタイ福音書」から前主日に続く箇所、弟子たちに向けた宣教派遣説教の中間部分に置かれた、迫害に対する予告。旧約日課は「エレミヤ書」から、いわゆる「エレミヤの告白」と呼ばれる一連の箇所の最後。使徒書日課は「使徒言行録」から、使徒パウロがエルサレム行きを決断してエフェソの長老たちに最後の別れの挨拶として語ったとされる訣別説教の全体。

**旧約日課(エレミヤ 20 章より)**

・「エレミヤ書」は、旧約三大預言書の一つに数えられ、前7世紀末から前6世紀初頭にかけての南王国が滅亡に向かった時代に活動した「預言者エレミヤ」の「預言集および預言者の物語」として編纂された預言書。「正典」に収められた本預言書では、あきらかに年代記述を含む物語が年代順に編集されておらず、編集編纂作業が暫定的なまま終了している印象を与えている。これは、バビロン捕囚からの解放期に進められたと考えられるユダヤ正典「律法と預言者」の編纂作業には、エレミヤらの系譜を引き継ぐ「祭司・預言者」集団が関与したと推認されるが、その際に「預言者エレミヤ」の評価が確定していなかったことによるのかもしれない(相対的に、「律法と預言者」編纂より百年以上遅れて始まったとされる「諸書」諸文書のなかでの「預言者エレミヤ」に対する評価は、一定の枠に定まったものとして見ることができる)。

・「エレミヤ書」中で「エレミヤの告白」と分類されてきた箇所は、全部で5か所ある(11:18~12:6、15:10~21、17:14~18、18:18~23、20:7~18)。このほかにも、一人称の語りとして記されている箇所(6:11、10:19、16:1~8 など。31:26 はおそらく編集者が写字生による挿入)があり、「エレミヤ書」の特徴となっている。

・「預言者エレミヤ」は、南王国ヨシヤ王の時代に進められた改革の担い手集団(王立エルサレム神殿大祭司ヒルキヤを中心とした神殿祭司グループと、王宮書記官シャファンを中心とした官僚グループ)に参画した、地方聖所出身の祭司(1:1「ベニヤミンの地アナトの祭司ヒルキヤの子」)であったと考えられる。ヨシヤ王の改革は、地方聖所の廃止(すなわち地方の祭司集団やそれと結びついた地方権力を無力化)し、中央聖所=王立エルサレム神殿に祭儀を集中させることとして実施されたと、「列王記」は伝えている。この改革は、長くオリエント世界の覇権を握っていた新アッシリア帝国の衰退に乗じて始められたことであり、改革派集団によって主導されたヨシヤ王の宮廷は、「親バビロニア派」の外交的スタンスを取ったと推認される。しかし、アッシリア最後のニネベ奪還作戦のために援軍として進軍していたエジプト軍に対して戦闘を仕掛けたヨシヤ王が戦死すると、南王国王宮は「親エジブ

ト派」に主導権が移った。ところが、バビロニア王ネブカドネツアルの登場によりエジプトの支配が後退し、南王国も事実上バビロニア帝国の属国になると、バビロニア傀儡の王=南王国最後の王ゼデキヤが即位することになる。このような時代に、南王国は常に、「親バビロニア派」と「親エジプト派」の間での権力闘争が続いていたと推認されるのである。「預言者エレミヤ」は、「エレミヤ書」の中では自らが「親バビロニア派」とみなされることを不本意な中傷であると訴えているが、実際は、ヨシヤ王時代に一定の党派性を持つようになった「親バビロニア派」に連なる「王宮預言者」として、王国滅亡まで(あるいはその後まで)、ユダ社会の中で一定の影響力を持ち続けた人物であったと考えられる。

・このような背景で語られた「預言者エレミヤ」の預言は、必ずしも孤高の信仰者として体制に対峙した存在であったとは考えられず、信念を貫いたがゆえに「嘆き」を深めたとも単純には言えないだろう。このような事情は、「正典」としての「エレミヤ書」が編纂された時代(王国滅亡から50年以降?)の編纂者の間では、実際に知られていたはずである。そうであればこそ、「預言者エレミヤ」個人の内的葛藤としての「告白」的預言を組み込むことによって、元来の政治党派色の強い「預言者エレミヤ」像を中和し、「預言集」や「預言者物語」の表層ではなく、その深層にあるはずの神学的・信仰的問いを掘り起こさせようとしたのだろう。

**使徒書日課(使徒 20 章より)**

・「使徒言行録」は、9章の「回心」物語で「教会デビュー」を果たした「サウロ」=「パウロ」が、11章でバルナバによってアンティオキア教会に招かれ、13章でバルナバを団長とする宣教団に参画したことを描くと、その後は、もっぱら「パウロ」の宣教物語として展開されている。日課箇所は、16章で独自の宣教団を組織してマケドニア・アカイア伝道に赴いたパウロらが、一度アンティオキア教会に報告に戻った後、再度、エーゲ海周辺地域の宣教に赴き、今度は小アジアを中心に宣教を進めた終わりに、エルサレム行きを前にして別れを告げる場面である。

・エフェソの教会は、19章でパウロの訪問が描かれているが、その前からすでにアポロらの宣教によって活動が始まっていたと物語られている。一連のエフェソ関連の記述は、「使徒言行録」中のパウロ宣教記の叙述としては例外的に大部となっている。パウロとエフェソ教会との関係は、「エフェソの信徒への手紙」からも推察されるが、パウロがエフェソのみならず小アジアの諸教会(黙示録の「アジアの七つの教会」など)に対して一定の影響を残したのは、間違いないだろう。

・日課箇所は、パウロが語った言葉の正確な口述記録ではないかもしれないが、「神の恵み」、「神の教会」、「あなたがたを造り上げる」など、パウロ書簡に見られるパウロに特徴的な表現や用語が含まれる。

・パウロの説教は、「教会」がいずれ入り込んでくる「残忍な狼ども」によって荒らされること、「教会」内に異なる教えを唱える者が出てくることを警告し、「長老」たちが「群れの監督者」としてそれに備えるべきこと、去って行くパウロとしては彼らを「神とその恵みの言葉」にゆだねること、に焦点がある。ここで想定されているのは、もっぱら、権力者など当局による組織的迫害ではなく、教会内で起こる混乱である。「使徒言行録」編纂の時代にはすでに、ドミティアヌス帝(在位=81~96年)のもとでの組織的迫害が散発的に起こっていたと考えられ、特に「黙示録」が示唆するように、エフェソを含む小アジア州では教会に対する組織的迫害が起こっていたことは確実視されている。けれども、パウロの説教の中に、そのようなことを示唆する言説はほとんど見られない。パウロが予見していなかったという解釈も可能ではあるが、主イエスの語られる迫害予告(福音書日課も参照)でもそうであるように、「新約」文書では将来の迫害に対する危機感は広く共有されており、増してや、組織的迫害のただ中に置かれたと考えられるエフェソの教会に関連するところで、パウロの口に語らせないほうが不自然である。「使徒言行録」編者は、敢えて、ここでは外部からの迫害に焦点を当てさせないように教会内の混乱を強調させたのかもしれない。「使徒言行録」編纂時の時代背景は、ローマ社会全体でユダヤ教徒・キリスト教徒に対する偏見や蔑視が広まりつつあった時期であり、教会内には、ローマ社会への順応の姿勢、敵意のない態度を示す必要があるとの認識が共有されていたと考えられるのである。そこで、社会からの信頼を得るためにも、内部の混乱を避けたいとの発想が強くあったということも考えられる。

・32 節「ゆだねる」は、「傍らに置く」が原義の「パラテイセーミ」で、「(種を)蒔く」「差し出す」「提示する」などの意味で用いられる語。

・35 節「受けるよりは与える方が幸いである」は、主イエスの御言葉として伝えられているが、「福音書」では知られていない。1世紀の教会では、四福音書のほかにも多くの「語録集」や「伝承集」が編纂されていたと見られ、少なくない文書史料が残されているが、その中にも該当する句は見当たらないとされる。前5世紀古典古代時代のギリシアの歴史家トゥキディデスの著作の中に「受けるより与えるほうが喜ばしい」という格言が伝えられていることは知られている。

### 福音書日課(マタイ10章より)

・日課箇所は、弟子の宣教派遣に際して主イエスが語られた説教としてまとめられた部分の一部で、「迫害の予告」がされている。共観福音書に並行箇所(マルコ13:9~13、ルカ21:12~17)があるが、「マルコ」および「ルカ」は、「受難週」の中で神殿建物を弟子たちと共に目にしながら語られた「小黙示録」と呼ばれる教えの一部として伝えている。

・24 節「弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない」は、類似する表現が「ヨハネ福音書」13:16でも伝えられている。初代教会では、キリスト信者としての自己理解に、主イエスとの師弟関係、主従関係が広く共有されていた。

・25 節「家の主人がベルゼブルと言われるのなら」は、12:22以下に置かれた「ベルゼブル論争」の逸話に先行している。「ベルゼブル」が「ベルゼブル論争」の逸話以外で取り上げられるのは、この箇所だけである。「マタイ福音書」は、この語を用いた主イエスと弟子たちの集団に対する批判が繰り返しなされていたという前提でこの箇所に取り上げているのだろう。また、この「家の主人(オイコデスマテース=家長/家主)」あるいは続く「家の者(オイキアコス=家人/家令)」という表象を、主イエスと弟子たちの集団のあり方を示すものとして強調しようともしていると考えられる。

### 来週の誕生日(8月8日~14日)

#### 主日礼拝の讚美歌から

- ・21-16 番「われらの主こそは」(= I 15「我らのみかみは」)は、19世紀英国の文筆家 J.コンダーの詩集の中から讚美歌に採用された歌詞で、黙 19:6 に基づく。曲は、18世紀英国の長老派牧師レーエフ・ハリソンによる聖歌集に収められたものの一つ。
- ・こどもさんびか-34 番「キリストのへいわ」は、音大を卒業して学校教師を経た後に献身したカトリック司祭・塩田泉の作詞作曲。コロサイ 3:15 から着想。
- ・21-371 番「このこどもたちが」は、アジアキリスト教協議会(CCA)が1990年に出版した新しいアジアの讚美歌集に収められた歌詞で、作詞者クラークについての詳細は知られていない。曲は、『讚美歌 21』編纂に際しての公募に対してこの歌詞のために作曲して応募されたもので、作曲者は音楽教室講師で萩教会オルガニストの山中知子。

#### 21-16 「われらの主こそは」

#### The Lord is King! Lift Up Thy Voice

1. The Lord is King! lift up thy voice, / O earth, and all ye heavens, rejoice; / from world to world the joy shall ring, / 'The Lord omnipotent is King!'
2. The Lord is King! who then shall dare / resist his will, distrust his care, / or murmur at his wise decrees, / or doubt his royal promises?
3. He reigns! ye saints, exalt your strains; / your God is King, your Father reigns; / and he is at the Father's side, / the Man of love, the Crucified.
4. Alike pervaded by his eye / all parts of his dominion lie: / this world of ours and worlds unseen, / and thin the boundary between!
5. One Lord one empire all secures; / he reigns, and life and death are yours; / through earth and heaven one song shall ring, / 'The Lord omnipotent is King!'

#### 21-371「このこどもたちが」

#### Hope for the Children